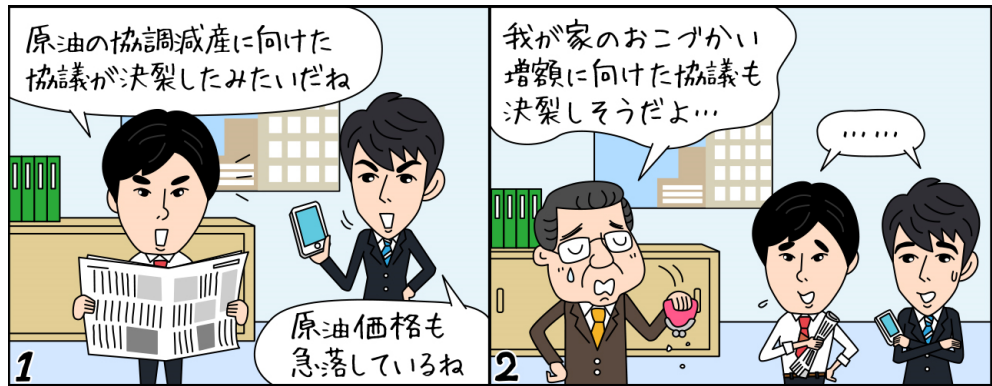


「新人目線」の用語解説

語句よみ

第220号



今回のテーマ 原油の価格動向に影響を及ぼす「OPEC」とは

日興アセットマネジメントの新人。営業推進部門に配属され、投信や経済について勉強中。

足元で原油価格が急落し、大きな話題となっています。原油価格の変動には様々な要因がありますが、今回の急落にはOPECの動向が大きく影響したようです。今回は原油価格とOPECを取り巻く環境について調べてみました。

1. OPEC(石油輸出国機構)

OPEC (Organization of the Petroleum Exporting Countries) とは、サウジアラビアやイランなどの主要産油国で構成される「石油輸出国機構」の略称です。産油国の利益を守り、石油政策の調整を行なう目的で1960年に設立されました。

OPECは加盟国間での利益確保と原油価格の安定化に向けて、定期的に総会を開催しています。原油価格は需要と供給のバランスによって変動するため、OPECが原油生産量を増やせば価格の下落要因となり、減らせば価格の上昇要因となります。

1970年代にはOPECの産油量は世界全体の過半を占め、原油価格の決定において大きな影響力を持っていました。この時、原油の供給制限や輸出価格の大幅な引き上げを行なったため、オイルショックが起こるきっかけの一つとなりました。

しかし、2000年代に入ると、米国が原油生産国として存在感を強め始めたことから、世界の原油生産の構造に変化が生じており、OPECの立場も変化しつつあります。

ステップアップ

原油価格は各国の国際収支にも大きな影響を及ぼします。ロシアなどの原油輸出国は原油高によって恩恵を受けるため、通貨高などにつながります。反対に、日本などの原油輸入国は原油価格の下落によって恩恵を受けると考えられます。



(次のページへ続きます)

2. シェール革命

米エネルギー情報局(EIA)などによると、米国の原油生産量は2018年に45年ぶりに世界1位となり、エネルギー界における存在感が強まっています。同国が台頭するきっかけとなったのが、エネルギー分野における21世紀最大の変革といわれている「シェール革命」です。

シェールとは地下の硬い地層に含まれる岩石のことを指し、これに含まれる原油のことを「シェールオイル」と呼びます。以前はこのシェールからの原油採取は技術的・経済的に困難とされていましたが、2000年代初頭に水圧で岩盤に亀裂を入れる採掘技術が開発され、同技術の発達とともに米国の原油生産量も増加してきました。

近年では技術革新によって採掘にかかるコストも大幅に低下しており、シェールオイルは1バレル=50米ドル以下でも採算が取れると言われていています。シェール革命によって、米国は原油だけでなく、天然ガス(シェールガス)の生産も増加しており、資源大国としての様相を呈しています。

米国が世界最大級の産油国として台頭してきたことなどによって、OPEC産油量の世界シェアはおよそ3割程度にまで低下しており、過半を占めていた頃と比べ影響力は低下していると考えられます。OPEC単独では需給調整による原油価格の安定化が難しくなっており、米国やロシアなどのOPEC非加盟国の影響が強まっています。

米シェールオイルの台頭に対して、OPECは2017年にロシアなどの非加盟の産油国とも協調する「OPECプラス」と呼ばれる枠組みを作り、協調減産を進めてきました。しかし、2020年3月に開かれた会合において、米国の原油生産シェア拡大に対するロシアなどの危機感の高まりを背景に減産の延長・強化に向けた協議が決裂し、原油価格は大幅に下落しました。

原油をはじめとするエネルギーの価格動向は世界経済全体に大きな影響を及ぼします。OPECや他の産油国の思惑などによって原油価格は変動すると見込まれるため、今後の各産油国の動向に注目が集まっています。

米国の台頭などによって、OPECの影響力は以前に比べ低下していると考えられますが、それでも原油価格の動向には大きな影響を与えそうです。今後の動向に注目ですね。

[facebook](#) [twitter](#) で、経済、投資の最新情報をお届けしています。

ステップアップ

2020年3月の原油価格急落の背景には、OPECプラスでの減産協議の決裂に加え、協調減産の主導役を務めてきたサウジアラビアの姿勢転換も影響していると言われていています。同国はこれまでの減産方針から生産拡大方針へと姿勢を変え、原油輸出価格の引き下げを発表しました。世界第2位の産油国である同国の動向は、原油価格に大きな影響を与えられそうです。

